痩せ願望と友人関係，主観的健康度の関連

田崎　慎治[1]・山崎　　茜[2]
（2018 年 1 月 9 日 受理）

The relationship among drive for thinness, friendship and health consciousness

Shinji TAZAKI and Akane YAMASAKI

Abstract: The present study explored the relationships between friendship and drive for thinness, self-esteem, and health consciousness. The participants were 72 male university students (average age 20.03 years old, average BMI 21.04 (SD = 2.39)), and 121 female university students (average age 19.97 (*SD* = 0.84)，average BMI 20.72 (*SD* = 0.84)). Participants completed a questionnaire assessing drive for thinness, conformity to informal group, degree of satisfaction with friends, tendency toward uniformity in friendship groups, self-esteem, subjective health and dieting behavior. Correlation analysis indicated that the significant correlation between drive for thinness and conformity to informal group in female. ANOVA indicated significant difference between average BMI and average point of drive for thinness. Additionally, there were some differences in female students' friendship styles. These results suggested that there is a possibility of existence of friendship style in female's drive for thinness.

Key words: Drive for Thinness, Diet Behavior, Friendship, Health Consciousness
キーワード：痩せ願望，ダイエット行動，友人関係，主観的健康

目的

一般的に，女性は，痩せているということが魅力の一つとして捉えられている。厚生労働省による H25 年度の国民健康・栄養調査では，成人女性における痩せの者(BMI18.5 未満)の割合は 12.3%と，過去 10 年間でもっとも高い割合であり，なかでも 20 歳代における痩せの割合は 21.5%であった。逆に女性における肥満者(BMI25 以上)の割合は 20.3%と年々減少しており，20 歳代においては 10.7%であった(厚生労働省，2014)。すなわち，20 歳代女性の 5 人に 1 人は痩せであるということになる。なお，成人男性においては痩せの者の割合は 4.7%，肥満者は 28.6%と過去 10 年間その割合はほとんど変わっていない。このことからも女性において特に強い痩身志向のあることがうかがえる。強い痩せ願望は，過度のダイエット行動を引き起こし，結果としていわゆる拒食症といった摂食障害の原因となりうる。

ではなぜ女性は痩せ願望を持つのであろうか。一つには先述のとおり痩せていることが美しいとされる社会的な風潮があ

[1] 広島大学大学経営企画室
[2] 広島大学大学院教育学研究科

る。例えば 1980 年代以降の女性モデルの平均体重は，年々減少していることが明らかとなっている（Garner, Gerfinkel, Schwartz & Thompson, 1980; Wiseman, Gray, Mosimann & Ahrens, 1992）。現在でも，ティーンエイジャー向けの女性誌ではダイエットに関する特集が多く見られる。

加えて，痩せ願望に関する個人内の要因についても多く検討がなされている。2000 年代以前の研究では，主に女性性受容や成熟拒否といった，摂食障害との関連で検討が行われていた（例えば，伊藤，2001；向井，1996）。その後，自尊感情や健康感といった精神的な健康との関連も検討されるようになった（例えば，田崎，2007）。特に自尊感情に関しては，痩せ願望の強い者ほど自尊感情が低く，自分自身に価値がないということには，自分の体型に対する自信のなさがその要因の一つとしてあることが示唆されている。また，女子学生で BMI が高い者は体格への否定的な意識や対人関係に関する悩みを抱えるために自分の精神的健康度を低く評価し，疲労自覚度も高くなる事が示されており，女子学生の痩せ願望が自身の健康状態の適切な評価を妨げる可能性が指摘されている（古屋・木村・内藤，2011）。

一方近年の研究では，女性性の（非）受容や自尊感情と痩せ願望の関連について，否定的な結果も示されており，むしろ，他者からどのようにみられているかといった観点が重視されていることが示唆されている。例えば，馬場・菅原(2000)では，自己顕示性の要因によって痩せ願望が高まることが示唆されている。また，田崎（2012）でも，他者からの否定的な評価を避ける傾向と痩せ願望に関連のあることが明らかとなっており，痩せ願望に影響を及ぼす要因として，他者の評価を気にする（他人の目を気にする）傾向のあることが示唆されている。他者からの否定的評価を避ける傾向について高坂（2010）は，青年の友人関係における，被異質視不安(異質な存在に見られることに対する不安)と異質拒否傾向(異質な存在を拒否する傾向)と友人関係満足度について検討を行っている。女子についてのみ言及すると，中学から大学までの女子に共通して，異質拒否傾向が強いものほど，非異質視不安が高く，異質拒否傾向の強いものは友人関係満足度も低いことが明らかとなっている。このことから，青年期における友人関係の在り方が痩せ願望に関連しているのではないかと考えられる。すなわち，友人関係を良好に保つにはみんなと同じでなければならないという信念が，自らの体型に対しても同様に影響を及ぼしており，痩せ願望を持つようになっているのではないかと考えられる。実際には痩せているにもかかわらず，多くの女性が痩せ願望をもっていることも，このことを裏付けているのではないかと思われる。しかし，このことについて実証的に明らかにした研究はみられない。そこで本研究では，青年期の友人関係に着目して，痩せ願望との関係について検討する。

以上のことから，本研究では大学生を対象として痩せ願望と友人関係満足度，異質拒否傾向と友人への同調性，主観的健康度の関係について検討を行う。加えて，これらの変数と強く関連していると考えられる自尊感情についても調査を行い，検討する。

方法

調査対象者および手続き

調査は国立大学 1 校ならびに私立大学 1 校に在籍する大学生男女を対象に行なった。調査は講義時間中に集団で実施し，質問紙の配布，回答は一斉に行った。調査の実施に先立ち，回答は無記名であること，結果は統計的に処理し，個人の結果を取り扱うものではないこと，回答を拒否できることやいつでも回答を中断できること，またそのことにより不利益を受けることはないことなどを文書および口頭で十分に説明を行い，同意を得られた男子大学生 72 名，女子大学生 121 名を対象とした。

これらの対象者のうち，後述する質問項目のすべてにおいて記入漏れ等の不備のなかった男子大学生 69 名，女子大学生 90 名)を分析の対象とした。平均年齢はそれぞれ 20.03 歳（$SD = 0.92$），19.97 歳（$SD = 0.84$)であり，平均 BMI はそれぞれ 21.04（$SD = 2.39$），20.72（$SD = 3.35$）であった。

調査項目

本研究では，以下について質問紙を用い調査を行った。

痩身願望　馬場・菅原（2000）が作成した，11 項目からなる痩身願望尺度を使用した。“体重が増えるのが怖い”や“も

っと痩せたいという思いで頭がいっぱいだ”といった質問に対して，“非常に当てはまる（5 点）”から“全く当てはまらない（1 点）”までの 5 件法で回答させた。

友人への同調性　石本・久川・齋藤・上長・則定・日潟・森口（2009）が作成した，10 項目からなる尺度である。“できるだけ友人と同じように行動したい”や“仲間はずれにされるのはぜったいに嫌だ”といった質問に対して，“あてはまる（4 点）”から“あてはまらない（1 点）”までの 4 件法で回答させた。

友人関係満足度　高坂（2010）において使用された，8 項目からなる尺度を用いた。同姓の友人とのつきあい方に関して，“今の自分の友だち関係に満足している”や“友だちとのつきあい方がうまくいっていると感じる”などの質問に“とてもあてはまる（5 点）”から“まったくあてはまらない（1 点）”までの 5 件法で回答させた。

異質拒否傾向　高坂（2010）が作成した，非異質視不安項目・異質拒否傾向項目のうち，異質拒否傾向 11 項目を使用した。同性の友人と付き合うときに，“自分の考えとあわない友だちとはつきあいたくない”や“気が合わない友だちとは関わりたくない”といった質問に対して，“とてもあてはまる（5 点）”から“まったくあてはまらない（1 点）”までの 5 件法で回答させた。

自尊感情　山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度を使用した。“私は他の人と同じ程度には大切な人間だと思う”や“自分にはたくさんの長所があると思う”などの 10 項目の質問に対して，“あてはまる（4 点）”から“あてはまらない（1 点）”までの 4 件法で回答させた。

主観的健康度　古屋・木村・内藤（2011）で使用された，女子大学生によくみられる不定愁訴に関する項目として，“立ちくらみをよくする”や“朝起きるのがつらい”などの 6 項目の質問に対して，“そうである（5 点）”から“そうではない（1 点）”までの 5 件法で回答させた。なお，これらの項目に関しては，先行研究では女子大学生を対象として用いられていたが，質問項目の内容から，男子大学生でも回答可能であると判断し使用した。

ダイエット経験　ダイエットの経験について，1）運動する，2）食事量を減らす，3）食事を抜く，4）○○ダイエットをする（炭水化物抜きダイエットなど），5）その他についてそれぞれ経験したことがあるかどうかを“はい”または“いいえ”で尋ねた。5）その他について“はい”と回答した場合は，さらに具体的にどのようなダイエットをしたか記述を求めた。

個人属性　調査対象者の性別，年齢および BMI を算出するために，身長と体重の記述を求めた。

結果

まず，それぞれの尺度得点を算出した。算出にあたっては，それぞれの先行研究にもとづいて，逆転項目については得点の方向を逆転させる処理を行った上で算出を行った。ただし，不定愁訴に関しては，先行研究では 6 項目個別に検討を行っていたが，本研究では主観的な健康度について検討する目的から，これらの総得点を算出し，これを主観的健康度として分析を行うこととした。なお，主観的健康度の α 係数は .61 であった。ダイエット経験については，各ダイエット行動について“はい”を 1 点，“いいえ”を 0 点として得点化し，合計点を算出した。すなわち，得点が高いものほど多様なダイエット経験のあることを意味している。ダイエット経験の α 係数は .76 であった。

各変数の得点について男女で差異がみられるか検討するために t 検定を行った結果，痩せ願望，友人への同調性，自尊感情において男女の得点に有意な差がみられ，痩せ願望および友人への同調性は男子学生よりも女子学生の方が有意に高く，逆に自尊感情は男子学生の方が女子学生よりも有意に高かった。また，ダイエット経験および主観的健康度については男子学生よりも女子学生の方が有意に高かった。Table 1 に，各変数の男女ごとの平均得点および標準偏差ならびに t 値を示す。

次に，各変数間の関連を検討するために，男女ごとに相関係数を算出した（Table 2）。男子学生では，痩せ願望と異質拒否傾向の間に有意な負の相関がみられ，痩せ願望の強いものほど異質拒否傾向が低かった。また，痩せ願望と BMI，ダイエット経験の間に有意な正の相関がみられ，痩せ願望が強いものほど BMI が高く，またダイエット経験が多かった。同時に，BMI とダイエット経験の間にも有意な正の相関がみられ，BMI の高いものほどダイエット経験が多かった。主観的健康度に関しては，自尊感情との間に有意な負の相関関係がみられ，自尊感情の低いものほど主観的健康度が高かった。

Table 1
各変数ごとの男子学生および女子学生における平均値(*SD*)と*t*値

	男子学生 (n = 69)	女子学生 (n = 90)	t
痩せ願望	18.26	32.09	8.32 **
	(9.86)	(10.83)	
友人への同調性	19.43	21.40	2.71 **
	(4.36)	(4.68)	
友人関係満足度	29.52	29.74	0.28
	(4.79)	(5.16)	
異質拒否傾向	27.97	27.29	0.47
	(9.95)	(7.45)	
自尊感情	23.49	21.64	2.62 **
	(4.32)	(4.45)	
ダイエット経験	1.06	2.08	4.52 **
	(1.32)	(1.50)	
主観的健康度	16.52	18.84	3.29 **
	(4.18)	(4.62)	

** $p < .01$

女子学生においては，痩せ願望と友人への同調性および自尊感情，BMI，ダイエット経験に有意な相関関係がみられ，痩せ願望の強い者ほど友人への同調性が高く，また，自尊感情が低かった。同時に，痩せ願望の強い者ほど BMI が高く，ダイエット経験が多かった。さらに BMI とダイエット経験にも有意な相関関係がみられ，BMI の高いものほど多様なダイエットを経験していた。主観的健康度に関しては友人への同調性および自尊感情に有意な相関関係がみられ，同調性の高いものほど，また自尊感情の低いものほど主観的健康度が高かった。

女子学生では，男子学生と異なり，友人への同調性，友人関係満足度，異質拒否傾向といった友人関係の在り方に関する尺度に関連がみられた。まず，友人への同調性と友人関係満足度については負の相関関係がみられ，異質拒否傾向との間には正の相関関係がみられた。すなわち，友人への同調性が高いものほど友人関係に満足しておらず，また異質拒否傾向が高かった。さらに，友人関係満足度と異質拒否傾向との間には負の相関関係がみられ，友人関係に不満を持つものほど異質拒否傾向が高かった。

Table 2
男子学生(右上:N = 69)および女子学生(左下:N = 90)における各変数間の相関関係

	痩せ願望	同調性	友人関係満足度	異質拒否傾向	自尊感情	BMI	ダイエット経験	主観的健康度
痩せ願望		-.07	-.06	**-.36**	-.06	**.40**	**.58**	.02
同調性	**.33**		-.11	.16	.21	.03	−.11	−.09
友人関係満足	.03	**-.28**		-.14	.10	.10	.08	−.10
異質拒否傾向	.15	**.34**	**-.29**		.08	−.13	−.21	.12
自尊感情	**-.28**	-.06	.08	-.08		.10	−.19	**−.31**
BMI	**.27**	.00	.19	−.03	−.02		**.28**	−.02
ダイエット経験	**.65**	.09	.13	.05	−.04	**.28**		.07
主観的健康度	.12	**.29**	−.07	.15	**−.27**	−.14	.04	

(注)太字は5%水準で有意な相関であることを示す。

続いて，対象者の BMI と痩せ願望の強さから，男女それぞれの平均値を基に 4 種類に分類した。すなわち，BMI ならびに痩せ願望がともに平均よりも高い群(以下 HH 群)，BMI が平均よりも高く，痩せ願望が平均よりも低い群(以下 HL 群)，BMI が平均よりも低く，やせ願望が平均よりも高い群（以下 LH 群），BMI ならびに痩せ願望がともに平均よりも低い群（以下 LL 群）の 4 種類である。男子学生における各群の人数はそれぞれ，7 人，27 人，17 人，18 人であり，女子学生における各群の人数はそれぞれ 24 名，32 名，28 名，6 名であった。以降では，これらの男女各 4 群について友人関係の在り方や自尊感情ならびに主観的健康度について検討を行った。

まず，各群における友人関係の在り方，自尊感情ならびに主観的健康度について，男女別に平均値を算出し，分散分析を行った (Table 3)。男子学生では，異質拒否傾向ならびダイエット経験について有意な主効果がみられた。Ryan 法による下位検定を行った所，異質拒否傾向では各群間に有意な差は認められなかった。一方，ダイエット経験については，HH 群ならびに LH 群が HL 群よりも有意に高く，また，LH 群は LL 群よりも有意に高かった。すなわち，BMI の高低に関係なく，痩せ願望の高い群は BMI が高く痩せ願望の低い群よりもダイエット経験が多く，また，BMI が低く痩せ願望の高い群は BMI と痩せ願望いずれも低い群よりもダイエット経験が多かった。女子学生では，ダイエット経験にのみ有意な主効果がみられ，Ryan 法による下位検定の結果，LH 群が HL 群ならびに LL 群よりも有意に高かった。すなわち，BMI が平均よりも低く痩せ願望の高い群は，BMI の高低に関係なく痩せ願望の低い群よりもダイエット経験が多かった。

次に，各群について，友人関係の在り方や自尊感情，ダイエット経験に男女間で違いがあるか検討するために，それぞれ *t* 検定を行った。まず HH 群については，友人への同調性に有意差がみられ（$t(29) = 2.76, p < .01$），女子学生の方が有意に高かった。また，異質拒否傾向については有意な傾向がみられ（$t(29) = 1.74, p < .10$），女子学生の方が男子学生よりも高かった。HL 群では，異質拒否傾向($t(57) = 1.76, p < .10$)ならびにダイエット経験($t(57) = 2.76, p < .01$)に有意差もしくは有意な差の傾向がみられ，異質拒否傾向については男子学生の方が有意に高く，ダイエット経験は女子学生の方が多い傾向であ

った。LH 群については，友人への同調性($t(43) = 1.88$, $p < .10$)，自尊感情($t(43) = 2.76$, $p < .01$)，ダイエット経験($t(43) = 2.43$, $p < .05$)，主観的健康度($t(43) = 1.99$, $p < .05$)にそれぞれ有意差もしくは有意な差の傾向がみられた。友人への同調性，ダイエット経験，主観的健康度についてはいずれも女子学生の方が有意に高いもしくは高い傾向がみられ，自尊感情については男子学生の方が有意に高かった。LL 群では，これらの変数について男女間で有意差はみられなかった。

Table 3
男子学生および女子学生の各変数における群別平均値(*SD*)と分散分析結果

		HH群（*SD*）	HL群（*SD*）	LH群（*SD*）	LL群（*SD*）	*F*
友人への同調性	男子学生	16.86(3.98)	19.96(3.87)	19.35(4.09)	19.72(5.04)	0.96 *ns*
	女子学生	22.83(5.10)	19.91(4.32)	21.86(4.37)	21.50(3.86)	1.97 *ns*
友人関係満足度	男子学生	30.29(4.56)	28.89(4.31)	28.59(5.05)	31.06(4.90)	1.03 *ns*
	女子学生	29.21(6.36)	29.47(4.12)	30.64(5.26)	29.17(3.44)	0.41 *ns*
異質拒否傾向	男子学生	20.43(9.83)	29.30(8.17)	25.29(8.13)	31.44(11.67)	2.81 *
	女子学生	28.63(7.12)	25.66(7.24)	27.75(7.83)	28.50(6.32)	0.47 *ns*
自尊感情	男子学生	23.57(4.95)	23.30(4.80)	23.77(1.93)	23.50(4.86)	0.04 *ns*
	女子学生	20.54(4.97)	22.84(3.16)	20.82(4.91)	23.50(3.69)	1.97 *ns*
不定愁訴	男子学生	17.43(5.42)	16.85(4.49)	16.18(2.98)	16.00(4.01)	0.29 *ns*
	女子学生	19.92(5.39)	18.75(4.85)	18.21(3.65)	18.00(3.06)	0.66 *ns*
ダイエット経験	男子学生	1.71(1.39)	0.41(0.99)	2.24(1.17)	0.67(0.94)	11.18 **
	女子学生	2.38(1.58)	1.13(0.96)	3.14(1.19)	1.00(0.82)	15.12 **

$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$

考察

本研究では，青年期男女における友人関係の在り方と痩せ願望ならびに自尊感情および主観的健康度について検討を行った。まず，これらの変数について，男女間の差異について検討する。痩せ願望は女子学生の方が男子学生よりも強く，ダイエット経験についても女子学生の方が男子学生よりも多く経験していた。このことはこれまでの多くの先行研究で明らかになっていることであり，一般的に考えても違和感のないことであるといえる。友人関係の在り方に関しては，友人への同調性について男女差で有意な差異がみられ，女子学生の方が友人と“一緒であること”を重視する傾向が強かった。その一方で，友人関係満足度や異質拒否傾向については男女差で有意な差は認められなかった。親密な友人関係には，幼児期から青年期にかけて男女差が見られることが多くの研究で指摘されており（例えば Benenson, 1993； Dunn, 2004； Parker, Low, Walker & Gamm, 2005），友人に対する感情や欲求そのものが男女で異なるという指摘がある。おおむね女性は男性に比べより親密な友人関係をもつ傾向にあり，それにより友人関係を重視する傾向にある（Dunn, 2004）。そして，女子は仲間を独占し，一緒に行動したいという欲求を男子より強く持っており，男子と異なる仲間集団を構成しているという指摘（有倉，2011）や，男子の友人関係は友人とは自分と異質なものであることを認識しているが，女子の友人関係は友人との同一性を望むものである（落合・佐藤，1996）という指摘もある。友人への同調性について男女差で有意な差異がみられ，女子学生の方が友人と“一緒であること”を重視する傾向が強かったという結果はこの点を支持するものだと考えられる。一方，友人関係満足度や異質拒否傾向については男女差で有意な差は認められなかったことについては，青年期の友人関係が思春期と比べ，心理的離乳が進み同質性を重視した関係から異質性を受容できる関係へと変化することが関係すると考えられる。高坂（2010）は，被異質視不安は年齢とともに低減していくことを明らかにしている。

次に，痩せ願望と友人関係の在り方や自尊感情，ダイエット経験，主観的健康度の関係について，女子学生におけるこれらの関連性をみると，痩せ願望は友人への同調性の高さと自尊感情の低さと関連していることが明らかとなった。田崎（2012）では，痩せ願望に影響を及ぼす要因として他人の目を気にする傾向のあることが示唆されているが，本研究から，なかでも友人の目を気にしていることが考えられる。近年，痩せ願望に影響するものとして，fat talk が着目されている。Fat talk は，

友人や家族との間で生じる体重・体型・エクササイズ等に関する会話であり（Arroyo & Harwood, 2012），太ることに対する嫌悪・抵抗を示す内容が含まれているのが特徴である。また，主に女性同士の会話で起こることが多いことも特徴である。Fat talk が身体不満に影響をおよぼすことはこれまでの研究で明らかになっている（例えば，Ousley, Cordero, & White, 2007; Warren, Holland, Billings, & Parker, 2012）。これらのことから，女子学生において，友人同士の日常的な会話の中で fat talk が起こり，その fat talk に対して同調することを繰り返すうちに，体型に不満を感じるようになり，自身の痩せ願望を増大させている可能性があると考えられる。

対象者の体型と痩せ願望の強さとの組み合わせ，すなわち，BMI と痩せ願望がいずれも平均よりも高い群（HH 群），BMI が平均よりも高く，痩せ願望が平均よりも低い群（HL 群），BMI が平均よりも低く，やせ願望が平均よりも高い群（LH 群），BMI と痩せ願望がともに平均よりも低い群（LL 群）の 4 つの類型による比較を行ったところ，ダイエット経験に関しては，男子学生では体型に関係なく痩せ願望のある者が，BMI が高いにもかかわらず痩せ願望を持っていない者に比してダイエット経験が多いという結果であった。女子学生では，BMI が低いにもかかわらず痩せ願望の強い者が，痩せ願望のない者よりも多くダイエットを経験しているという結果であった。痩せたいからこそダイエットを行うというのはある程度自然な成り行きといえるかもしれないが，本研究からは，特に女子学生においては，実際には痩せているにもかかわらず痩せたいと思っている者の方がよりダイエットを多く行っているという結果であり，ダイエット行動の動因が痩せたいという思いにより引き起こされていることがいえる。このことは，いわゆる不健康なダイエット行動にもつながり，摂食障害等の発症の原因にもなりかねないことを示唆しており，摂食障害の発症に関する従来の知見を支持しているものといえるだろう。女子大学生における BMI と主観的健康度の関連を検討した古屋ら（2011）では，痩せである BMI 低値群では身体的評価の低下から健康度が低下し，高値群では精神的評価の低下から健康度が低下する事が認められた。石本ら（2009）では，こうした中・高校生の女子の友人関係において，友人との心理的距離の遠さと同調性の高さの両方の特徴を持つものは心理的適応が低いことを指摘している。さらに石本ら（2009）は，中学生，高校生ともに同調性も友人との心理的距離も近い密着群が見られるが，高校生の密着群は他者評価を気にして自己表明をせず，自己受容や自己実現的態度で望ましくない結果を示すことを指摘している。

また，友人関係の在り方や，自尊感情，主観的健康度についての男女間の違いをみると，BMI と痩せ願望いずれも高い者については，男子学生よりも女子学生の方が友人への同調性が高く，異質拒否傾向も高いことが明らかとなった。一方，BMI が高く痩せ願望の低い者では，男子学生の方が異質拒否傾向が高いことが明らかとなった。BMI が低く痩せ願望の高い者については，女子学生の方が男子学生よりも友人への同調性や不定愁訴が高く，また自尊感情が低くダイエット経験が多いという結果であり，BMI と痩せ願望いずれも低い群ではこれらの違いはみられなかった。これまでに体型と痩せ願望の強さの類型による友人関係の在り方や主観的健康度について調査した研究は少ないため明確にすることはできないが，友人関係の在り方などについて，自身の体型と痩せ願望の強さが介在していることが示唆されるといえる。今後，より詳細に検討することが必要であると考えられる。

最後に，本研究の成果および限界と今後の課題について述べる。本研究から，痩せ願望や主観的健康度に，友人関係の在り方が関係していることが明らかとなった。青年期女子において，実際には痩せているにもかかわらず，痩せ願望を持つその原因の 1 つに友人と“一緒であること”を求める心理的背景があり，それによって主観的な健康にも負の影響を及ぼしていることが示唆された。しかし，このことは，自分の友人が皆“自分より痩せている”ことが前提である可能性もある。今田(1996)は，161 名の学生を対象に，“あなたと同じ性，同じ背丈で，あなたより体重の重い人はこの大学にどれくらいいると思いますか”と質問し，パーセントで回答させた。その結果は，女子学生では平均 33.5%であった。もし全員が正しく自身の体型を認知しているならば，値は限りなく 50%に近づくはずであるため，全体的に自らの体型を実際以上に太めに評価していたと今田は述べているが，この調査結果は，“自分が太っていると思っている”のではなく，自分の周りの人間が“自分より痩せていると思っている”と解釈することもできる。そうであるならば，本研究の結果のように，自分の周りの人（友人）は自分よりも痩せているから，“一緒でありたい”ために自分も痩せたいという説明はある程度合理的であるといえるだろう。本研究では対象者自身の実際の友人の体型について調査を行っていないため，今後，この観点から調査を行い，より詳細に検討する必要がある。それにより，不適切なダイエット行動や摂食障害発症に至るプロセスの解明の一助になること

が期待される。

引用文献

Arroyo, A., & Harwood, J. (2012). Exploring the causes and consequences of engaging in fat talk. *Journal of Applied Communication Research. 40*, 167-187.

Benenson, J. F. (1993). Greater preference among females than males for dyadic interaction in early childhood. *Child Development*, *64*, 544-555.

Dunn, J. (2004). *Children's Friendships: The Beginnings of Intimacy*. Oxford: Blackwell Publishing.

馬場　安希・菅原　健介 (2000). 女子青年における痩身願望についての研究　教育心理学研究, *48*, 267-274.

古屋　かな恵・木村　友子・内藤　通隆 (2011). 女子大学生における体格と主観的健康度との関連　栄養学雑誌, *69*, 326-334.

Garner, D. M., Garfinkel, P. E., Schwartz, D., & Thompson, M. (1980). Cultural expectations of thinness in women. *Psychological Reports*, *47*, 483-491.

今田　純雄 (1996). 青年期の食行動　中島義明・今田純雄（編）人間行動学講座 2　食べる――食行動の心理学――(pp.114-131)　朝倉書店

石本　雄真・久川　真帆・齊藤　誠一・上長　然・則定　百合子・日潟　淳子・森口 竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連　発達心理学研究, *20*, 125-133.

伊藤　裕子 (2001). 青年期女子の性同一性の発達――自尊感情, 身体満足度の観点から――　教育心理学研究, *49*, 458-468.

高坂　康雅 (2010). 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向：青年期における変化と友人関係満足度との関連　教育心理学研究, *58*, 338-347.

厚生労働省 (2014). 平成 25 年国民栄養・健康調査報告　厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室.

向井　隆代 (1996). 思春期女子における身体像不満足感, 食行動および抑うつ気分：縦断的研究 カウンセリング研究, *29*, 37-43.

落合　良行・佐藤　有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究, *44*, 55-65.

Ousley, L., Cordero, E. D., & White, S. (2007). Fat talk among college students: How undergraduates communicate regarding food and body weight, shape & appearance. *Eating Disorders*, *16*, 73-84.

Parker, J. G., Low, C. M., Walker, A. R. & Gamm, B. K. (2005). Friendship jealousy in young adolescents: Individual differences and links to sex, self-esteem, aggression, and social adjustment. *Developmental Psychology*, *41*, 235-250.

田崎　慎治 (2007). 大学生における痩身願望と主観的健康感, および食行動との関連　健康心理学研究, *20*, 56-63.

田崎　慎治 (2012). 女子大学生における痩せ願望の現代的特徴に関する研究　日本健康心理学会第 25 回大会発表論文集, 112.

Warren, C. S., Holland, S., Billings, H., & Parker, A. (2012). The relationships between fat talk, body dissatisfaction, and drive for thinness: perceived stress as a moderator. *Body Image*, *9*, 358-64.

Wiseman, C. V., Gray, J. J., Mosimann, J. E., & Ahrens, A. H. (1992). Cultural expectations of thinness in women: An update. *International Journal of Eating Disorders*, *11*, 85-89.

山本　真理子・松井　豊・山成　由起子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, *30*, 64-69.

有倉　巳幸 (2011). 生徒の仲間集団の排他性に関する研究　鹿児島大学教育学部実践研究紀要, *21*, 161-172.